

北海道の
労働と福祉を
考える会

[2004年度総会資料]

2005年2月20日(日)18:00~
札幌市市民会館第7会議室

2004年度 総会資料目次

- | | |
|-------------------|-------|
| 1. 今年度の活動概要 | 高柳 晴香 |
| 2. 生活健康相談会報告 | 嶋田 宇大 |
| 3. 生活保護申請付き添い報告 | 世良 迪夫 |
| 4. 今年度の調査 | 寺嶋 祐一 |
| 5. 他団体・機関との連携について | 佐々木 宏 |
| 6. 会計報告 | 山本 侑 |
| 7. 今年度の反省と来年度へ向けて | 高柳 晴香 |
| 8. 「私と労福会」 | |
| 9. 来年度の事務局紹介 | |

1. 今年度の活動概要

ホームレスというと怠け者といった世間一般の見方がありますが、実際に話を聞いてみると以前は働いていたが、ちょっとしたきっかけや不運なことが重なってしまったために路上生活をせざるを得ない状態になってしまったという方がたくさんいます。こういった認識の差を受けて、私たち北海道の労働と福祉を考える会は発足以来当事者を知ること、そのために「当事者とかかわり続けること」を大切に、今年度もこのことを常に考えながら活動を続けて参りました。

近年、札幌市をはじめとして多くの市民の方々やマスコミが路上生活者問題に注目しています。ただし、彼らに向けられる視線は必ずしも彼らの現状を反映したものとはいえない場合があります。こういった現状を受け、今年度は当事者とかかわる一方で彼らの置かれている現状の厳しさを多くの人に伝える必要があるという認識をもち活動をスタートさせました。その主な内容は以下の通りです。

第一に、計5回の生活健康相談会です。そのうちの3回は炊き出し・総合相談会という名目で札幌市と共催という形で行いました。札幌市民会館の会議室を借り、暖かくくつろげる場所作りと食事や生活物資の配布、健康・生活の相談などを行いました（参照：生活健康相談会）。

第二に、生活保護申請のための付き添いや、その他当事者の方々が直面している問題にできる限りの対応をしてきたことです。生活保護申請の付き添いは、主に生活健康相談会の場で付き添いを希望する当事者の方と当会のスタッフが約束をして区役所へ行くという形をとっています。今年度は約60ケースの申請の付き添いをし、多くの方の生活保護受給が決定しました（参照：生活保護申請の付き添い報告）。

第三に、札幌市からの委託という形で行った人数確認調査です。今年度は9月11日の早朝から札幌駅や大通りだけでなく札幌市内の広い範囲を見て回りました。結果は90名の方を確認しました（参照：人数確認調査報告）。

第四に、随時行った夜回りです。夜回りは私たちのほうから当事者の方々が生活する場へと足を運び、2～3ヶ月に一度しかない炊き出し以外でも当事者の方々とつながりを大切にするために行っています。

第五に、札幌市保護課との懇談、北海道内の支援団体と合同で行った北海道庁との意見交換会です。今年度札幌市は就労支援プログラムや、ホームレス専門相談員の配置など新たな試みをスタートさせました。また、北海道内のホームレス支援団体の緩やかなネットワークも立ち上げられ新たな動きが生まれました（参照：他団体・機関との連携について）。

第六に、路上から居宅へと移られた方への事後調査です。当事者の中には路上生活から居宅に移ったあともさまざまな問題を抱えている場合が少なくありません。そこで現状を把握し、会としてそういった方々に何ができるのかを模索するために現在調査を行っています（参照：居宅生活者調査報告）。以上が今年度の当会の活動概要です。

今年度の特色としては、五つ目の他団体・機関との新たな交流が生まれたこと、六つ目の居宅者生活調査を始めたことをあげることが出来ます。また、新たに生まれてきた問題点もあります。詳しくはこの後の各報告で明らかにし、来年度の課題として取り組んでいきます。

2004年度の活動内容報告

- 5月20日 札幌市との意見交換会①
- 5月29日 炊き出し・健康相談会（札幌市との共催）
- 7月18日 生活健康相談会
- 7月23日 北海道庁との意見交換会
自立支援ネットの立ち上げ
- 8月25日 全道支援ネットワークの集まり①
- 9月11日 人数調査
- 9月12日 札幌市との意見交換会②
- 10月2日 炊き出し・健康相談会（札幌市との共催）
- 10月15日 学習会
- 11月6日 炊き出し・健康相談会（札幌市との共催）
- 11月26日 全道支援ネットワークの集まり②
- 12月18日 年越し朝回り
- 1月22日 生活健康相談会
- 2月20日 総会

2. 生活健康相談会報告

今年度、労福会は表1に示すように計5回の「生活健康相談会」を行い、そのうち、5月と10月、11月は札幌市との共催で行いました。「生活健康相談会」の内容は年々充実してきており、今年度も野宿をしている方々に喜ばれる相談会を実施することができたと思います。以下では、(1)生活相談会の目的・意義、(2)来場者について、(3)相談会の内容、(4)支援者について、(5)札幌市との共催について、の順で今年度の相談会を総括したいと思います。

(1) 生活健康相談会の目的・意義

「生活健康相談会」の大きな目的は、野宿者に短時間ではあるが暖かくくつろげる場所を提供し、労福会のメンバーと出会い、コミュニケーションをとる中で信頼関係を築き、脱路上の可能性を探ることです。また、生活物資を渡す、健康に関心を持ってもらう、(4)で詳しく触れますが野宿者の現状を市民に広く知ってもらう機会をつくる、という目的もあります。今年度もおおむねこの「目的」が達成できたと思います。

労福会の「生活健康相談会」は他の支援団体と違って二ヶ月に一回程度しか開いていません。私たちはそのような労福会の「生活健康相談会」はどのように意義を持つのか、繰り返し問い直してきました。毎回60名以上の来場があるのは、生活物資を配布する他に、野宿者のニーズをできるだけくみ取り、様々な人の協力を得て、健康相談や散髪、区役所へ生活保護申請の付き添いなど、独自の支援をしているからだと思います。そこに「生活健康相談会」の大きな意義があり、野宿者からの信頼を集めているのだと思います。

(2) 来場者について

今年度の来場者数は表1のようになっています。来場者は、古くから野宿をしている人、最近野宿になった人、再野宿の人などがいます。今年度の特徴として、労福会が一度脱野宿の支援をしたが再び野宿になってしまった人とよく出会うことが挙げられます。労福会では毎年数十人もの野宿者の脱野宿をサポートしているにもかかわらず来場者数が減少しないのは、新しく野宿になる人、生活保護を切られ再野宿になる人などの状況が反映されています。

また来場者には、野宿者以外に、収入がなく友人のところに居候している人や、脱路上を果たしたが生活に不安がある方など様々な人がいます。私たちは、支援の対象を野宿者だけに限らず、生活に困っている人なら誰でも参加してよいというスタンスで「生活健康相談会」を行っています。これは労福会として、「相談会」の対象はどこまでなのか、今まで議論を重ねてきた結果です。年金や生活保護だけで生活できないことや、長期不況とり

ストラ・高失業率から、貯蓄を使い果たし、実際に野宿をしていなくてもいつ家を失うかわからない人がいる状況があります。私たちは支援を重ねていく中で、単に野宿をしている人たちだけを支援したのではなんら解決にならない、住む場所が路上か家かだけでは計れない野宿者問題の深さを認識してきました。真の「自立支援」とは何なのか、どこまで支援をすべきなのか考えさせられます。

(3) 相談会の内容

・物資の配布

今年度も、おにぎり・豚汁（1月は弁当とみそ汁）、タオル、歯ブラシ、使い捨てカイロ、缶詰、石けん、軍手、靴下、ひげそり、風呂券、衣料品などを、野宿者のニーズ、季節に応じて配布しました。

風呂券は北海道公衆衛生浴場協会が発行しているもので、同協会に加盟している銭湯ならどこでも利用できます。毎回2枚程度配布しています。食事は、10月までは養護老人ホーム・静山荘の調理室の方々におにぎりや豚汁を作っていただいていたのですが、諸事情により、11月からは弁当屋である「山の手屋」に頼んで作っていただくことになりました。1月は試しに、鮭や唐揚げの弁当と味噌汁に変えてみたところ、野宿者には大変好評を博しました。衣料品は毎回多くの市民から寄付をいただきました。今年度の特徴は、労福会の活動がいくつかの広報に載ったこともあり、それをご覧になった方から寄付をいただくことが何件ありました。毎回「余るんじゃないかな」と心配するほどの衣料品を用意しましたが、あっという間にさばききれました。ただ、冬季は衣料品の需要が高く、どのような配り方をしたら野宿者に公平に配布できるかという課題が残っています。

・生活相談

相談会では私たち支援者が野宿者に話しかけに行きます。最初は世間話からでもいいので、野宿者と私たちがつながれるきっかけを作ります。話が進むと、借金や病気など野宿者が抱えている様々な相談を持ちかけられることや、生活保護でもう一回自立したいという野宿者も出てきます。相談会の場には司法書士や医師も参加して下さるので、例えば債務問題が解決できたり、病気の人には健康相談をすすめ病気が見つかったりします。このように私たちは野宿者のよろず困りごと相談に乗りながら、希望者には生活保護申請のために役所への付き添いを受け付けることにしています。

今年度は、生活相談から付き添いへの移行がこれまで以上にスムーズになったと思います。労福会としては、いかに生活相談や健康相談から役所への生活保護申請を含めた自立につなげるかが、今後の課題です。

・健康相談

北海道勤労者医療協会（勤医協）の医師と医療ソーシャルワーカーにボランティアで診察とアドバイスにのっていただきました。毎回 5～10 名ほどの相談があり、高血圧や糖尿病など慢性疾患の患者が多いのが特徴でした。また野宿に至る前の労働を反映してか、腰痛を訴える人もいました。ほとんどの相談者は野宿に至る前に医療機関に通院していた人で、医療機関を受診する必要がある状態でした。そこで私たちは相談会后、検診に行きながら生活保護の申請もサポートするという支援も行いました。労福会の健康相談は、医師に診てもらえる貴重な機会のため、野宿者の健康状態を維持する上で毎回健康相談を行う意義は大きいと思います。

毎回来ていただいている医師の方は、「相談者の疾患には強い自覚症状を示さないものが多く、相談者以外の来場者の中にも医療機関への通院が必要な人が多く含まれている可能性がある。相談会来場者の健康を守るためには、『待つ姿勢の健康相談』だけでなく、血圧計を手にも机をまわるなどの方法も検討すべきではないか」ということをおっしゃっていました。また、記録を保管し継続して活用出来るようにするため、例えばカルテのようなものを作成することや、相談者のその後をフォローできる方法を検討することも課題です。

・散髪

希望者には毎回散髪を行っています。北海道民主医療機関連合会（民医連）から紹介していただいた理容師や、11 月は NPO 法人・日本理美容福祉協会札幌センターの方にボランティアで来ていただきました。散髪は長蛇の列ができるほど野宿者に人気で、毎回 20 人前後の散髪を行いました。

（4）支援者について

毎回の相談会に支援者として 30 名以上が参加しています。学生や市民をはじめ、医師、教員、理美容師、弁護士、司法書士、医療ソーシャルワーカー、議員、教会の方、元野宿者など非常に広範な人が支援に関わっています。特に今年度は司法書士や医療ソーシャルワーカーなど専門家の関わりがいつそう広がったことが特徴でした。このことが、例えば野宿者の債務問題の解決につながるなど、野宿者からいつそう信頼を寄せられる結果になったと思います。また、私たちは野宿者問題を市民に直接アピールするという観点から、相談会は誰でも気軽に参加できる開かれた場にしていきます。毎回初めて参加する支援者がたくさんいます。共通している感想として、「野宿者が普通の方で、しかもとても親しみやすかった」「誰でもちょっとしたことで野宿になってしまうんだなということがよくわかった」という声が聞かれます。こうして野宿者に対する理解と支援をする人の輪が広がっています。

また、相談会の初参加者は、野宿者に何を話しかけたらよいのかわからなく、何かしたいけど後込みしてしまう人がいる場合も少なくありません。そこで私たちは、初参加者には経験者が一緒に話しかけに行くようにするなどの改善を試みました。おかげでその後の相談会はとてもいい雰囲気でしたと思います。

(5) 札幌市との共催について

札幌市との共催企画である「炊き出し・総合相談会」では、午前中に健康診断（検尿、血圧測定、血液検査、X線）、お昼に食事と生活物資の配布、午後に総合相談として、精神保健相談（札幌こころのセンター）、就労相談（ハローワーク）、法律相談（札幌弁護士会人権擁護委員会）、生活・福祉相談（区役所保護課）が行われました。なお、健康診断は10月の時のみで、11月は健康診断の結果配布のみ札幌市が担当しました。また、この企画はNPO法人・ハンド・イン・ハンドも共催しています。札幌市との共催が定期化され、野宿者の間にもそれが定着し始めたように思います。

札幌市と共催することの意義は主に2つあると思います。第一に、ハローワークや人権擁護委員会、区役所保護課など多くの機関を巻き込みながら、普段できない野宿者のニーズに沿った支援ができたことです。例えば労福会では、就職に関する事柄は知識も情報もないため、野宿者への支援に限界がありました。それが今回ハローワークの力を借りることにより、従来できなかった就職支援が多少は可能になりました。実際、就労相談をする野宿者が毎回たくさんいました。第二に、行政が路上生活の実態を直視することによって、行政の対応がより野宿者の要求にそう施策になりうる可能性が開かれたことです。

なお来年度は、春(5、6月)は労福会が中心となって市や他の支援団体の方と一緒にいきます。秋はNPO法人・ハンド・イン・ハンドが中心となり、労福会はその補助として関わることとなっています。

表1 2004年度 北海道と労働と福祉を考える会
生活健康相談会（炊き出し）

回	日時	①来場者数（）内は昨年 ②生保同伴数（注）	特記事項
1	5月29日（土） 9時～15時	① 109 （123） ② 12 （7）	札幌市と共催 総合相談会実施
2	7月18日（日） 18時～21時	① 106 （135） ② なし （16）	スタッフ不足で生保同伴不可 マッサージコーナー実施
3	10月2日（土） 9時～15時	① 74 （122） ② 12 （17）	札幌市と共催 総合相談会実施
4	11月6日（土） 18時～21時	① 64 （88） ② 17 （13）	<u>10月2日実施健康診断の結果返却</u>
5	1月22日（土） 18時～21時	① 74 （85） ② 11 （15）	

（注）生保同伴数…生活保護受給を希望する方とスタッフが区役所へ行き、申請の手続きなどをお手伝いしています。

<各回共通事項>

・会場

札幌市民会館（北1西1）

・主な内容

- ①炊き出し（おにぎりと豚汁、又はのり弁）
- ②生活物資配布（タオル、石鹸、靴下、缶詰、歯ブラシ、入浴券など）
- ③衣料品配布
- ④健康相談
- ⑤散髪（第1回除く）

・参加スタッフ

学生・市民の方合わせて30～40名が参加しております

・お知らせ方法

野宿者へ炊き出しを実施することをお伝えするために、当会は早朝に大通・札幌駅付近でビラ配りを行っております

3. 生活保護同伴報告

路上生活を脱する一つの方法として生活保護の申請が挙げられます。住所不定で身寄りも無く、そのためなかなか仕事にも就けない。生活保護はそのような辛い生活から抜け出したいときの助けとなります。当会では野宿者に生活保護制度について説明を行い、希望する方には会のスタッフが付き添って行政窓口へ申請の相談に行っています。野宿者は生活保護について正確な知識がない方がほとんどで、一人で相談に行くのは心細いものがあります。付き添いは、野宿者の不安を和らげ、生活保護をスムーズに申請できるようになれば、という思いから生まれました。今年度に当会が付き添いをした方は約 60 名で、そのうち約 50 名は生活保護を受給することができました。

現在 生活保護を受ける際に住まいが定まっていなくて、それを認められるのはたいへん難しい仕組みになっています。住まいを持たない野宿者がなんとか生活保護を申請するためには、大きく分けて 4 つ方法があります。まず、保証人や前金がなくても借りられるアパートをなんとか探し入居する方法。次に、救護施設に緊急入所し、施設を一時的な居場所として申請を行い、その後居宅を探して入居する方法。また、治療の必要な方については病院に入院し、病院を一時的な居場所として申請を行い、治療後に居宅へ入居する方法。そして、今年度から市が取り組みを始めたホームレス救護施設就労支援入所を利用する方法があります。これは仕事探しを優先したい当事者に対し求職活動などの支援を救護施設で行い、自立を支援するものです。今年度に当会で付き添いをした野宿者は、アパート入居が約 25 名、救護施設入所が約 20 名、就労支援入所が約 5 名、病院利用などその他の事例が約 10 名でした。

ただ、いずれの方法も容易にはできません。保証人・前金なしで借りられるアパートを探すのはかなり困難です。近年になってアパート確保の際に市が敷金を給与する事例も見られるようになりましたが、今のところ市は敷金給与にかなり慎重な姿勢をとっており、さほど多くの事例はありません。また、救護施設の空きが少ないので何週間も入所するまで待つことになる場合や、入院の必要がないと判断される場合も多いので、申請のための場所だけでも確保するのはひと苦労です。救護施設就労支援入所では、仕事に就いて退所された方もたくさんいますが、一方で期限付き雇用など不安定な職もあって退所後の生活を支えるのに十分ではない場合もあり、再び野宿となった方も見受けられます。

付き添いの活動を行う上でいくつか課題もあります。まず、付き添いを請け負うスタッフが一部の人に偏ってしまうことです。大勢で行う炊き出し・総合相談会とは異なり、付き添いでは個人個人に大きな負担がかかります。付き添いの希望に対応しきれないこともありました。前年度よりスタッフが増えたことで、少しずつ個人への負担は軽減されてきてはいますが、未だ十分に負担が分散しているとはいえません。

また、付き添いを行った記録が徹底してなされなかったことも改善する必要があります。スタッフは付き添った内容を記録書に書いて会に提出することになっているのですが、記

録書の作られなかった付き添いが何件かありました。記録書がないと、付き添いに関する情報が把握できず、事後に繋げることが大変になります。

他に、生活保護を受け居宅で生活するようになった方へのサポートをどのようにするかということが課題として挙げられます。居宅に移っただけでは十分に自立したとはいえ、その後生活保護を切られてしまい再び路上生活に復帰する人も少なくありません。会として居宅に住むようになった方に年賀状を出すなどはしていますが、他にもどのようなことができるのか、どの程度までできるのか、今後具体的に話し合っていく必要があります。当会の目的は生活保護申請をすることではなく、あくまで自立を支援することだからです。

4. 今年度の調査

今年度、「労福会」は3種類の調査を行いました。第一に「人数確認調査」があります。当会は発足以来、毎年、野宿者の人数をカウントしてきました。この調査は、札幌市のどのような場所でどれくらいの人達が生活しているのか、また季節や年毎の人数の推移はどのようになっているかを把握するために行われています。今年度9月の人数調査は、昨年と同様に札幌市からの委託を受けるという形で行われました。また、12月には「年越し企画」として生活用品配布を兼ねて、おおよその人数を確認しました（コラム「夜回り・朝回り報告」参照）。第二に「札幌市ホームレス生活実態調査」を行いました。この調査は、北海道の「ホームレス実態把握調査」の一環として札幌市が行ったものです。当会は、10月2日の炊き出し・総合相談会の際に調査のお手伝いをしました。調査項目は性別や年齢などの基本属性のほか、「野宿をするに至った理由」や「現在の収入」など多岐に渡ります。第三に「脱野宿後の追跡調査」です。当会がお手伝いをさせていただいた中で、居宅での生活を送られるようになった人に対し調査を行いました。以下、「人数確認調査」、「脱野宿後の追跡調査」について報告致します。

「人数確認調査」について

・調査方法と課題

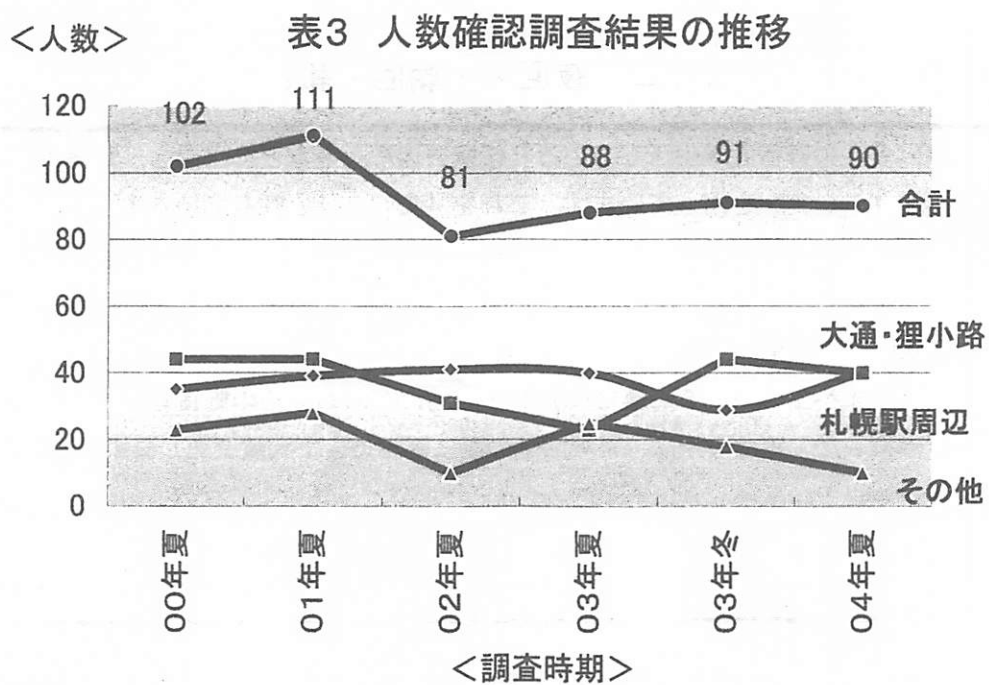
これまでの経験から私たちは、調査範囲を札幌駅周辺、大通公園、豊平川河川敷、市内主要公園などに限定しています。また、調査開始時間も重要となります。寝場所にいる人を確認することによって、その人が野宿者であると判断しやすいこと、日が明ける頃には彼らは寝場所からいなくなってしまうため、重複してカウントする可能性が生じてしまうことから、調査は早朝4時ころから開始されます。具体的にはスタッフが2人1組になって各区域を回り、目視で年齢や性別を確認しています。このような方法で調査を行っていますが、課題もいくつか残されています。第1に調査参加者が不足しがちであることです。同時刻に広域を回るといふ調査の性格上、多くの調査員が必要となります。第2に目視調査の客観的な限界があげられます。ひと晩中歩き回る人や建物の中にいる人たちも少なくないと思われます。また、野宿者を見過ごしてしまう可能性もないとは言いきれません。このような点を考慮すると、私たちの調査は必ずしも完全とはいえ、実際には調査結果より多くの野宿者が市内に存在すると考えられます。今後も調査を続けていく上で、私たちは十分な調査員を確保するとともに、「どこに野宿者がいるのか」という情報を事前に収集することで、より正確な実態を把握できるよう努めます。

・調査結果から

まず、区域別では、札幌駅周辺と大通周辺で生活している人が圧倒的に多いといえます。両区域とも人目のつかない階段やベンチで夜を過ごす人が大勢います。特に札幌駅のバスターミナルには毎回30人程の野宿者が確認されます。また、昨年度と比べて豊平河川敷で生活している人が減少しました。これは03年10月の河川敷改修工事の際に、札幌市が野宿者に対して退去命令を出したためです。次に年毎の推移についてです。調査開始当初の00年頃と比較して、野宿者数は緩やかな減少傾向にあるものの、依然として100名近くの人たちが札幌の寒空の下での生活を余儀なくされています。また、当会が関与した人に限定しても年間50人から60人以上の人達が生活保護を受給し「脱野宿」を果たしています。このことを考えると、新たに野宿を強いられた人や生活保護を打ち切られ再度野宿へと至った人が大勢いると予想されます。このように、私達は難しい状況に直面していますが、その都度、粘り強く支援し続けることの重要性を再確認しています。

表2 人数確認調査結果（04年9月11日実施） **合計90名**（昨年比-1）

<調査場所>	<人数> ()内は03年冬
札幌駅・駅前バスターミナル	40 (29)
大通・狸小路	40 (44)
中島公園・ススキノ	7 (1)
地下鉄主要駅バスターミナル	0 (1)
JR沿線市内主要駅	0 (1)
豊平河川敷	3 (15)



「脱野宿後の追跡調査」

今年度 10 月より、脱野宿後の皆さんの生活の実態を把握するため「脱野宿後の追跡調査」を開始しました。会設立以来、取り組んできた生活保護申請同伴も 5 年目を迎え、多くのスタッフが様々なケースに立ち会ってきました。いまや、生活保護申請同伴は、当事者を路上から行政へつなぐ当会の重要な活動の一つです。

ただ、生活保護を利用して野宿からアパートに移られた方々の数が増える一方で、再び路上生活に戻ってしまう人も少なくないことを私たちは認識することになりました。アパートに入居し新生活を始めた時の皆さんの笑顔を知っている私たちとしては、とても残念なことです。このような問題意識から脱野宿後の皆さんの生活の様子、苦労などを明らかにすることを目的にし、2004 年 12 月から調査をすすめています。2 月 20 日現在では、8 人の方に調査にご協力いただいています。今後も随時、調査件数を積み重ね、新年度に入ってから結果のとりまとめと報告をしたいと考えています。

コラム「夜回り・朝回り報告」

当会は、多くの野宿者が生活している札幌駅周辺や大通などに出向き、野宿者と継続的なコミュニケーションを図っています。これを「夜回り」と呼んでいます。実際に駅などで生活している野宿者と対話して、彼らの抱えている問題・悩みを共有すること、様々な事情で炊き出しなどに参加できない人への対応をすることが主な目的です。今年度は計 10 回ほどの夜回りを実施しました。特に、年越し企画として 12 月 19 日に行った「早朝回り」では、多くの人へ生活用品をお渡しできたと同時に、おおよその野宿者の人数を確認することができました。参考までに、早朝回りの際に確認できた人数を記します。

札幌駅：26 名 大通・狸小路：20 名 新札幌：4 名 豊平河川敷：2 名 JR 琴似駅：1 名
合計 53 名

5. 他団体・機関との連携について

今年度も、労福会は会員以外の多くの方々からもご支援を受け活動を進めてきました。衣類ほか物資の提供、また活動に様々な便宜をはかっていただくなど、ご協力をくださった皆様に感謝したいと思います。どうもありがとうございました。ここでは、そうした多くの皆様についてすべて触れるスペースもありませんので、ご協力いただいた、また連携のもとに活動を進めてきた諸団体・機関に限り報告したいと思います。

まずは「ホームレス」支援団体との関係についてです。今年度は昨年度以上に関係が広がり深まった年であったといえます。在札の支援団体のNPO法人ハンドインハンドさんとは、札幌市との共催となった「総合相談会」における民間サイドのパートナーとして連携を昨年以上に深めています。ただ、「総合相談会」の役割分担を十分に詰めて議論しなかったことや日常的な情報交換が足りなかったことなどから、細かな不都合が生じたこともありました。現在、来年度に向けて「総合相談会」共催時の役割分担をハンドインハンドさんと調整を進めていますが、来年度もますます情報交換と意思疎通を円滑に進めていくことが望まれます。また、今年は旭川、苫小牧、函館にある支援団体との連携が具体化した年でもありました。2004年8月に札幌市内3団体と各地の団体が、北海道庁との懇談会のため初めて集まった際に、「ホームレス支援ネット北海道」を発足させました。このネットワークではメーリングリストの運用を開始しています。しかし、緩やかなネットワークを作ったに過ぎず、また情報交換もそう盛んであるとは言えません。北海道の支援団体のネットワークは、道庁との関わりにおいて意味を持ちうると思われれます。今のところ鮮明ではありませんが、道庁のホームレス問題に関する動きが来年度具体化する可能性は高いので、その時に、今年できたネットワークの力が試されることになるでしょう。

昨年度の総会で課題とした本州の支援団体との関係です。今年度は日程の都合上、全国の支援団体の交流会にスタッフを派遣することができませんでした。しかし、2005年2月には仙台の支援団体「仙台・夜回りの会」の活動視察を行いました。総会の直前に行われた仙台訪問の詳細は省略しますが有益な訪問となったことだけはここに明記し、来年度も同様の機会を持つよう期待しています。

次に、当会の活動に力を貸してくださった諸団体について報告します。今年度も昨年度同様、炊き出しの際の食事の準備は、養護老人ホーム・静山荘さんをお願いしていましたが、やむを得ない事情のため、2005年10月の炊き出しを最後に、静山荘さんからの食事提供は終了しました。2005年11月からは、西区の弁当屋・山の手屋さんのご協力を得て、炊き出しの食事を用意することになりました。今年度後半の2回の炊き出しでは、山の手屋さんが格安で用意してくださったおにぎりやのり弁が大好評を得ています。食事を自らで継続的に用意することが難しい当会にとっては、これまでの静山荘さん、現在の山の手屋さんのような協力機関の存在は欠かせません。静山荘さんのこれまでのご厚意ご協力に感謝すると同時に、無理をお引き受けくださった山の手屋さんにも感謝したいと思います。

どうもありがとうございました。

北海道民主医療機関連合会(民医連)さんからも、昨年度に引き続きご協力いただいています。民医連さんは、生活健康相談会へ医療専門家を派遣してくださり、また、理美容師さんやマッサージ師さんを紹介していただきました。さらに、先に触れた道内支援団体のネットワークは、民医連さん無しには成立しなかったといっても過言ではありません。来年も是非、労福会へのご協力をお願いいたします。

また、今年度は昨年度に始まった法律の専門家との関係も広がりました。今年度も人権擁護委員会の弁護士さんたちと「総合相談会」をご一緒しています。また、今年度後半から、札幌司法書士会の有志の方々が、労福会の活動に積極的に参加されています。債務処理を中心に野宿者の法律相談に関するニーズは大きいので、これらの関係が来年に向けてさらに深まっていくことを期待しています。

最後に、札幌市ほかの行政機関との関係です。今年度あたりから市との協力関係の形はある程度、整ってきました。たとえば、年に二回の「総合相談会」の共催、野宿者調査の受託実施、三回の意見交換会(04年5月、9月、05年3月)などが、ほぼ「定例化」してきました。このことは2005年1月に発表された札幌市の『ホームレスの自立支援のための取組方針』のなかに労福会ほかの民間支援団体がそれなりに位置づけられたということに関わっています。来年度も、まずは、整ってきた枠組みのなかで、引き続き協力関係を継続していく必要があります。ただし、今年度からスタートした札幌市の「ホームレス」支援のあり方に、労福会は全面的に満足しているわけではありません。今年度も昨年度同様、日常的な活動に追われ、市に対してよりより支援のあり方を提案していく試みが弱かったといわざるを得ません。この点については、今年度から始まった道庁との関係においても同様、協力関係を維持しつつも、活動の中で知りえた当事者が抱える様々な困難をふまえ行政に対し「言うべきことは言う」という姿勢を貫いていく必要があるでしょう。

6. 会計報告

表4 2004年度会計報告

・前年度からの繰り越し	1, 264, 534-	
		前年度比
・収入		
会費	158, 000-	(-43, 000)
カンパ	193, 180-	(-23, 444)
札幌市より助成金	160, 000-	(-40, 000)
人数確認調査	199, 500-	(-480, 998)
歳末助け合い運動	0-	(-200, 000)
利息	9-	(-5)
小計	710, 689-	(-787, 447)
・支出		
生活健康相談会	610, 351-	(-99, 529)
生保申請同伴	114, 631-	(-129, 285)
夜回り	26, 893-	(-63, 766)
人数確認調査	199, 500-	(+93, 700)
広報	36, 114-	(-10, 843)
通信	73, 850-	(-243)
事務用品	13, 745-	(+1, 343)
2003年度総会	7, 337-	(-3, 337)
その他	10, 303-	(-28, 397)
小計	1, 092, 724-	(-240, 687)
・来年度への繰り越し	882, 499-	
・2004年度会員	賛助2件(昨年度3)	
	一般19名(昨年度16)	
	学生16名(昨年度16)	

以上、2004年度会計報告をいたします。

2005年2月20日

代表	椎名恒
事務局長	高柳晴香
会計	山本侑

*今年度のまとめ

・収入について

会の活動は、皆様から頂いた「会費」や「カンパ」、各種助成金をおもな収入源としています。今年度の収入は、昨年度の収入に比べて約30万円減少してしまいました(注)。これは、今年度の総会の日程が昨年度より早まったためです。現時点(2月10日)においてはまだ「歳末助け合い運動」から頂ける寄付の正確な金額がわからないので、これを収入に含む事が出来なかったからです。しかし、いずれにしろここ数年は助成金、寄付金による収入が大幅に減少しているため、来年度はそういったものに積極的に応募する必要があります。

また、このように会の収入は非常に不安定でありますので、皆様からのご協力を得るための努力をよりいっそうしていきたいと考えております。

・支出について

昨年までと同様に、支出においては「生活健康相談会」の占める割合が高くなっています。昨年の課題として、この「生活健康相談会」における支出(主に配布する物資にかかる費用)を減らすことが挙がっていました。そこで今年度は、物資管理を強化し、できるだけ在庫物資を利用していくことを徹底しました。そして皆様から様々な物資を寄付して頂いたこともあり、今年度の「生活健康相談会」における支出を約10万円減らす事に成功しました。

また、「生保申請同伴」・「夜回り」での支出が減ったことも特徴のひとつです。「生保申請同伴」での支出減少は、今年度の同伴数自体が減ったことや、一回の同伴にかかる費用が減少したことによるものだと考えられます。また、「夜回り」についても昨年度に比べて実施回数が減ったことが理由としてあげられます。表4をみていただけるとわかるように、今年度の支出は全体的に昨年度より減少しました。

・おわりに

今年度も本会の活動に協力し、寄付金や衣類・生活用品を寄付していただいた皆様に心からお礼を申し上げます。皆様からの寄付は、路上で生活する方たちの支援に使わせて頂いております。来年度も是非よろしく申し上げます。また、寄付に関する質問・意見等がございましたら事務局にご連絡ください。皆様の声を伺うことでよりよい会にしていきたいと思っております。

(注)

昨年度の収入額には、一昨年の冬に行われた人数確認調査での入金額¥480,988も含まれています。これを差し引くと、収入の小計での実質の前年度比は、-306,459となります。

7. 今年度の反省と来年度へ向けて

会の活動も5年を終え、ある程度の経験やノウハウが蓄積されてきたということが言えます。しかし、個々の活動がなぜ行われるようになったのかということが次の世代にうまく伝わっておらず、単に前年度の活動の模倣をしてしまっているという面があります。今年度は特にそういった面が強く、今一度個々の活動の意味や目的を確認または再定義し、野宿をされている方、脱野宿を果たして居宅に移られた方、あるいは野宿の予備軍と呼ばれるような方の現状や思いにあった支援の形をとることが必要であると考えています。

また、今年度は行政や他の支援団体の方々との関わりが去年にもまして増えてきました。札幌市そして私たちを含めた市内の支援団体の活動が、全体として当事者にあった形での自立のお手伝いがしていけるよう自分たちの役割・活動の目的を常に確認し、互いに協力できるところは協力し合い、その一方で主張するところでは主張するといった形で目的達成のために一歩ずつ進んでいって欲しいと思います。さらに、行政や他の支援団体との協力に加えて市民の方々へのアピールも重要な活動のひとつであります。ホームレス自立支援法の制定などによって野宿者への関心が高まっている中で、野宿者の現状を少しでも多くの人に伝える努力をすることを今年度の目標としていたのですが十分に行えていたとはいえません。また、野宿者自身も自分の置かれている状況が自分自身の責任だけではないということをもっと認識する機会を持つことが必要でしょう。そこで、当事者も含めた多くの人々がともに学ぶ機会を設けていくなどという試みが出来ないでしょうか。

ともあれ、まずは路上でも居宅でも「かかわり続けること」を大切にし、そこから見えてくる問題を解決していくために自分たちの活動がどうあるべきかを考えていく必要があるでしょう。来年度の活動が当事者にとってよりよいものとなることを次の事務局の方々に期待します。

8. 私と労福会

高柳晴香（北海道大学教育学部2年）

今年度の労福会は、おじさんたちにとっていい活動をする事が出来たのでしょうか。私は今年一年事務局長をやって、それなりに会の活動の方向性に影響を与えてしまった一人だと思っているのですが、私にとってこの一年の活動は後悔が大きかったなとすごく反省しています。今年度の最初の頃は何をどうやってやればいいのかということが分らず、今まで先輩方がやってきた活動を模倣するだけで精一杯でした。頭だけで活動を考えてしまっていたという感じです。そんなことをやっていたので、今年の労福は魅力がないとか、炊き出しの雰囲気は温かみがないといったことも言われてしまい、自分自身の会の運営能力のなさや人間としての魅力のなさを感じたこともありました。でも、大切なのは私がどうであるとかじゃなくて、労福会がおじさん達にとっていい会であることが目的であること。だから、いい活動をしていくには頭の中でおじさん達のことを考えるのではなく、実際に会うことから始まるのではないかと思うようになりました。一年かけてようやくここまでたどり着くのは遅すぎかもしれませんが、マイペースに来年度もかかわりつづけていきたいです。

皆さん今年一年お疲れ様でした。来年度もおじさん達も含めて共にごがんばりましょう！！

篠原 睦（北海道大学教育学部二年）

毎日冷え込みの厳しい日が続いています。つるつる道を急ぐ家路の途中、私はホームレスのおじさん達のことをぼんやり考えます。「こんなにも寒い街で家を持たないで生きていくなんて嘘のような話だな」と改めて思うのです。

初めて労福会の活動に顔を出してから、一年が経ちました。

「どんな気持ちで労福に来たの？」

今まで先輩や先生方に、何度聞かれたか分からないメジャーな質問ですが、その度私はいつも口ごもり誤魔化してしまいます。どうにも、格好の良い動機が言えそうにないからです。

私自身、常に余裕のある人間ではないし、自分の将来に対してさえ不安だらけです。人並みにはお金も洋服も遊びもお酒も好きです。……お酒に関しては人並み以上ですが。(笑) 例えばなにか宗教心のようなしっかりとした土台があるわけでもなく非常にフラフラとした存在です。時には身近にいる大切にすべき人にさえ、心ない言葉を投げつけ傷つけてしまうこともあります。

赤の他人（ホームレスのおじさん）の人生のことを本気で考えられる器の大きさなんて、私にはないのかもしれない。

でもただひとつ言えることは、私は「人」が好きです。目を合わせて会話をすることで、ほんの少しでもいい、人と人になにかつながりのようなものが生まれるあの瞬間が大好きです。夜・朝回りも、炊き出しも、居宅調査も、生保申請の付き添いも、事務局会議であれこれと話し合うことも、振り返ってみると私にとってはやはり「楽しい」ものだったと思えるのです。なぜならそこに、ホームレスのおじさんや他の労福会のメンバー、その他たくさんの人との和があったからです。今まで知らなかった多くのことを、見て聞いて考えることができた、新鮮な一年間でした。

嫌々話しかけられたとしてもおじさんは嬉しくないだろうと思いますし、これからも私が労福会の活動に参加する動機としてはそのようなもので十分なのではないか、と最近になってやっと思えます。「偽善」という言葉を恐れて、困っている人を横目にしながら「なんとなく気になっている気持ち」を行動に移せないでいる人って、実は多いと思います。だからこそ本当はもっと、労福会のメンバーが増えるといいですよ。

継続することは、始めることよりもずっとずっと難しいことです。そのことを肝に銘じて、私はこれからも自分らしく、この会に関わっていきたいと思います。来年度も、皆さんどうぞよろしく！！

嶋田宇大（北海道大学理学部三年）

同伴が一日かかってしまったとき、あるいはアパートを探すのにめちゃくちゃ苦労したとき、俺は「もう二度と同伴なんかやってやるか！」って思った。

けど結果的に次の炊き出しの後も同伴をしていた。なぜなんだろう？俺はみんなが同伴表に名前を書き込んでいるのを見ると、つい自分もしないとだめかなと思ってしまう。

たぶんそれも理由の一つにあるんだろうけど、もっと他にも理由があるはずだ。

先日、5月の炊き出しからずっと脱路上をサポートし11月にやっと脱路上を果たせたおじさんに久しぶりに会った。おじさんの様子から生活が安定してきていることがうかがえたし、「アパートに暮らせて本当によかったよ、ありがとう」って言われ一緒に脱路上を喜びあったとき、自分も心から本当にうれしかった。あの苦労が一気に吹き飛んだ気がした。一時は脱路上の意志がなくなったりもして役所に行ったとき苦労したものだったけど、こうして感謝されると同伴はやめられなくなるものなのかなあ。それはいいすぎか。

けど俺は労福会がただ生活物資を渡すだけなら、今のように深く関わっていないと思う。おじさんの意志を尊重しながら脱路上をサポートしているところが他団体と違って良いと俺は思うから、自分もその支援に加わっていると頭では考えている。なのでそう考えると、同伴をしないわけにはいかない。

眞鍋千賀子

労福会に参加して、おじさん達とはなしてもう四年になります。沢山の体験をしました。そしてモヤモヤはつきり解決してないことを抱えました。おじさんの自立って何なの？かわったあとかんじるかれらの複雑な自立生活の現実はどう私は対応できるの？また役所の対応・行政への怒りとかです。

私は「仕方が無い」と割り切つてしまえないたちで、保護課窓口に行つて脱路上のため生活保護同伴(これは会の活動の一つ)と生活の場(アパート)探しを真剣にしますが、役所は申請を出させない形から話してくるので、例えば再申請の人の場合に申請してみろ、却下するぞとか、アパートを用意する時敷金は出せません。ネーと言われ、ねばつて、粘つて確保する話し合いになったりします。かなり緊張します。

おじさんが同伴してもらつてよかった、一人では無理だったろう。と聞く時、役にたつた！と思いますが役所は、誓約書をかかせ、三ヶ月で仕事を探して自立します、と印をおして提出させます。

三ヶ月後仕事がないときどうなるの？という厳しい生活がまっています。このあと、一ヶ月刻みで、弁明して仕事がないときは、打ち切りです。

ある日おじさんが申請書を書いているときに、係長さんがわたしをよびました。そして、話をする事になりました。「おじさんに、仕事をする意志意欲があればどんなしごとでもあるんだ」という話しでした。これは、社会問題を個人の資質の問題にすりかえていて、役所らしい発想です。おじさんが、どんなに不安で何とかして働きたい、仕事があったらとかんがえて心が痛んでいるのに、役所で交わされる会話です。いじめと同じですねー。

これからも私は、多くにおじさんと話をし、かかわります。そして、人と人との関わりの大切さを感じるでしょう。

おじさんと話しをする時、私が特に決めていることがあります。おじさんをゆっくり丁寧に聞くことです。こうすることで会の活動の内実をつくっていくし、おじさんと私たちの方向や気づき、必要としていることも分かってくるかもしれません。札幌でテント村はなくて、おじさんと話しをできるのは、夜回り、生活相談会です。

最後に自分の心構えのことですが、心に深く沈黙の場を意識すること。そこでの息づかいを大事にすることです。このころの作業は四年間聴き続ける力のもとでした。夢中で始めて、おおきな社会問題に直面していて、心の声は、貧しい人だ、排除された人だと聞いただけで、「負担」を感じたりしない、共に歩きましょう、と促すのです。

椎名結実（北海道大学法学部4年）

企画や夜回りでおじさん達に会うと、私はこんな風になりたくないなあと思う。だけど、じゃあどんな生き方をしたいかと言われて、浮かぶ言葉はあまりない。自分の長所を生かして、人に喜ばれる仕事をして、幸せに生きたいと漠然と思う。きっと私が出会ってきたどんなおじさんも、幸せに生きたいと思って今日までやってきたに違いない。

労福会とは自立を支援するところだけれど、自立とは自分でその生きるべき生を選び取ることだから、自分がどう生きたいか分かっていない学生は、どうしても自立しているとは言えない。大学四年間はものすごくあっという間に過ぎていくから、漠然としたものは、漠然としたまま、いつまでも形にならない。いざ、その進路を決める段になって、その分からなさめまいがする。

ところで路上での生活にみじめさを抱えたまま、その状態に甘んじているならそのおじさんもやっぱり自立していない。自分が本当には何を望んでいるのか、その問いの答えを発見するアンテナは、この両者にはひどく鈍くしか働いていないのではないかとふと思う。これまであまり使ってこなかったアンテナは、すぐには敏感にはならない。いつでもヒントは自分が嬉しかったりつらかったりしたことの中に隠れているのだけど、簡単には分からないし、どこまで分かってもしつわりはない。自立というのはある時点で達成したことになるようなものではなく、流されたり、甘えたり、諦めたりしながら、今日はひとつ、明日はふたつ、自分の基準で選び取るものを、つくってゆこうとする心のあり方なんだろう。アンテナがそんなに鈍っているのは、もしかしたらそれを伸ばしたらつらすぎてやっていけなかったからなのかもしれない。動物じゃなくて人間に起こった感情と理性の発達は、その比較的安定した生活が条件だ。だって生と死のぎりぎりの淵で生きなきゃいけないのに、心がつらさを感じてしまったら死にたくなるじゃないか。

だけど路上のおじさんはともかく、今学生に、何かそんなにつらいことがあるのだろうか。なんでこんなに鈍っているのか。ひとつ分かったような気がするのと、やっぱりひとつ分からない。

「労福と絵画」

上西知子（北海道大学大学院教育学研究科博士課程）

今年度は展覧会の絵画制作の為に休学していましたので、特に後期、労福の活動には参加しませんでした。しかし日々「何の為に絵を描いているのだろうか？ここでこんな絵を描いているより、区役所の生保申請に同伴して一人でも多くの人が生保を受けられるようになる方が、人の役に立つのではないか。私は何をやっているのだろうか」とMLの報告を読みながら思うのでした。

しかしそのうち、労福の活動と展覧会の為の絵画制作とは、それ程遠くないのではないかと考えるようになりました。というのは、絵を描くというのは、文学、演劇、音楽等、芸術は皆そうですが、現実の世界とは別のもう一つのヴァーチャル世界（これが表象世界です）を作ることです。なぜ表象世界を作るのかというと、この表象世界を通して現実世界を解釈し理解するためです。つまり現実世界はカオスに近い世界で、それを生のままで把握し、理解することは不可能に近いほど難しいのです。私達は普段意識しませんが、たいていは言葉を手段にして表象世界をつくり、それによって現実世界を理解しています。これは、ある事柄を「まるで～のようだ」という違う事柄を通して解りやすく説明する比喩の役割に似ています。「ハンバーガーはまるでおにぎりのようだ。持ち運びに良い。」このように絵画の場合も「現実世界とはまるでこういう風に見える」と絵という表象世界を作って現実世界を理解しやすくするのです。

一方同じように法制度、行政制度というのも実はヴァーチャルな表象世界です。例えば生活保護制度という表象から想定される現実世界は、人間の権利として健康で文化的な生活を保障されている世界です。しかし現実にはそうになっていない。これは労福の活動を通して、ホームレスの人達からの言葉の中で明らかにされ、生保申請に同伴してみても初めて解ることです。又法制度とその運用とにズレがあることが解ります。あるいは制度のすき間から解釈の幅が出て、その解釈を一方向的に役所側がしているという問題も解ってきます。このような問題の多い現実が見えてくるのは、法制度という表象が目指す世界と現実世界とのズレと矛盾を労福の活動が明らかにするからです。労福の一人一人がホームレスの人達との生活相談や、夜回り、生保同伴という行為を通して、当事者の生の声を聞き、より当事者に近い場面で現実を見ることができると感じます。

ところで私の作る絵画の表象世界が現実世界を表現しているかどうか、現実世界の理解に役立つかどうか、ズレや矛盾があるかどうか、それを判断していただく展覧会が私の試金石になります。

安部薫道（北海道大学法学部4年）

今年度は活動にほとんど関わらずじまいでした。ですから、本稿を書く資格が僕にあるのかどうか疑いました。しかし、後ろめたく感じながらも、最終的に書こうと決めました。以上、前置きを少し。

さて、最近、二件の保護同伴をしました。感じたことは、いろいろな活動への関わり方がありうるなあということです。今までは、まがいなりにも活動のコア近辺にいて気づきませんでした。しかし、この1年間は、活動を少し違った角度から（逆説的ですが、むしろ行為主体的に）見ることでこれに気づきました。

プライベートな話で恐縮ですが、僕は、4月から大学院で社会保障法を研究します（年金

法、福祉法、公的扶助法など)。もし、労福会の活動に参加しなかったら、この道を選ぶことはありませんでした。

現在は、自分の中で活動を積極的に位置付けられています。ですから気が楽です（無責任で申し訳ないです）。具体的には、勉強との関係に限定していえば、問題意識の維持、行政実務の把握などが目的として挙げられます。

少し無機質な話になってしまいましたが、僕はこの会が好きです。来年度もよろしく願います。

世良迪夫（北海道大学工学部1年）

前々から路上で生活する人に興味があったわけでもないのに、ただなんとなく労福会に参加してみたいと思ったのが昨年春のことでした。今は「私と労福会」を書いているので、もう1年近く労福会の活動に関わっていることになります。

会に参加する中で、私はさほど積極的には行動しませんでした。地道に路上生活者問題について見つめさせて貰いました。同伴などなかなか味わえない貴重な体験もしました。支援する側とされる側が付き合う難しさも知りました。活動における責任の重さも後々から少しずつわかってきました。

未だに全然わかっていないのが、労福会が私に「なんとなく参加したい」と思わせたのは何だったんだろうということです。私の心の琴線に触れる要素が何かしら会の活動に含まれていると思うのですが、そのところまだイマイチはっきりしません。これから路上生活をする方々に関わっていく中で何か見えるようになってスッキリしたいところです。

千葉あゆみ（藤女子大学文学部三年）

始めに活動に参加させて頂いてわずか1ヶ月余りの自分の文章をこのような場に載せて頂くことに、恐縮しながらも感謝の気持ちをお伝えしたいです。まだ短い期間ですが私がこの会の活動を通し感じてきたことを綴りたいと思います。

ほんの1ヶ月前、友人を通してこの労福会の存在を知り、「自分が今まで知らなかった世界について学びを深めよう」というような気持ちで会議のドアをたたきました。私自身夏場は自宅から自転車で学校まで通っており、札幌駅の高架下などで薄暗闇と寒さの中おじさんたちがひっそりと暮らしている姿を何度も見かけることがありました。しかしその当時は本当に「見かける」だけであり、おじさんたちの姿を通し、“ろくに働いてもないのに、暖かい家で生活し学校に通う自分の存在はなんだ”と自問していたのを覚えています。この労福会の活動を通して初めて夜回りや炊き出しに参加させて頂いて、おじさんたち

とお話しするとき、おにぎりを手渡すとき、「私のことどう思うのかな」というように戸惑いがありました。それでも炊き出しでおじさんが話していた言葉を思い返してノートに書き綴ってみると、そこにはノート数ページにわたって一人のおじさんの人生があり、こんな風に見ず知らずの自分に対し自分を語ってくれる人がいることへの感動や人間関係の広まりを感じました。会議の中で、「繋がりを一時的なものにしないために」という議論をよくお聞きしたように思うのですが、私自身炊き出しの場面で出会った方と、この繋がりが一時的なものになってしまいはしないかという不安や、そういうこと抜きにお話をしていた自分に対し「無責任なのかな…」と感じた経験から、改めて一人の人の人生と関り付き合っていくことの困難さを感じ、それと共にこの労福会の取り組みで生活を立て直された方のお話から活動の意義深さを感じました。

ボランティアという活動については、それぞれの人達が会社員であり学生でありといった本分を全うするために活動に制約が出てしまうという困難があると思います。けれども一人一人が自分の生活を抱えながら、同じ社会を生きるものとして少しずつでも一つの社会問題を改善に近づける取り組みをしている（一人一人の意識で違いはあっても）というところが、ボランティアやこの労福会の大きな魅力なのではないかと感じています。まだ短い期間ですが私自身この活動を通じ、沢山のことを学ばせて頂きました。きっとまだまだこのような活動を知らないまま関心を秘めている人は沢山いるのではないのでしょうか。この活動がさらに多くの人をまきこんで発展する活動になっていくことを願うと共に、自分自身もできることを通し少しでも活動にお力添えできたらと思っています。長々と勝手なことを書き綴ってしまいすみません……。今後とも宜しく願いいたします。

菅 洋一（北海道大学教育学部3年）

労福会に参加するようになって1年半ほどになります。初参加は札幌市民会館での炊き出し。誘われるがままに参加し、指示してもらったことをやることしかその時はできませんでした。それまでになかった体験をすることで自分なりに収穫のある経験となりました。「路上生活者を支援する」と言っても、その路上生活者がどういう人達なのか参加する前は実際よくわかっていません。「怖い」などのイメージを持たれやすいのではないかと思います。意外と気さくな人が多く、何よりみんな話し好きです。そのように、路上生活者の姿を知ることから活動参加は始まりました。

「どうすれば路上生活する人を支援できるのかな？」と今でも単純に思います。炊き出しでは一時の室内スペースと食糧、その他の物資を提供します。また、路上から脱却したいという人に、区役所などへの同伴もします。私も炊き出しに参加したり、同伴をさせてもらったりしますが、炊き出しが路上から一定時間の避難的な施しであることを感じたり、路上生活をしていてさえ生活保護申請が難しいことを知りました。役所では、中には厳し

く言う人もいます。活動への参加と並行して、物事がなかなかうまくいかない部分、人間社会の中で目を逸らしたくなるような部分も垣間見ることになります。ボランティアの活動だけでは路上生活者を支援しきれないのではないかと、参加を続けるほど強く感じるようにもなりました。

ですが、労福会への参加者の熱心さにはよく影響を受けます。たった一人の人を助けようとするために、あれこれ考え、あちこちに出向き、何をしようかと懸命に動きます。ボランティアと言っても、やる以上は中途半端な気持ちでは許されません。自分の行動にしっかりと責任を持つこと（もちろんそれは路上生活者やその他の人にも言えることですが）と一緒に活動する参加者から私は学んでいます。

参加者や支援してくれる人の善意で成り立ち、いろいろと課題が多い会ですが、そこには学ぶべきことがたくさん散りばめられています。参加する機会に恵まれたことに感謝し、活動にこれからも貢献できたらと思います。

中山治光（北星学園大学社会福祉学部2年）

2月4日に事務局会議があった。労福の創設時からの話しを交えながら、現状についていろいろな話しが出た。メンバーの話しを聞きながら、今から何年前になるだろう・・・ある出来事を思い出していた。それは、夏だった。釜ヶ崎に現場学習に来る学生のグループに内々で、不測の事態に備えて女性を内に男性は外側で行動するようにという「指示」が出ていることが聞こえてきた。「それは釜ヶ崎の日雇い労働者に対する予断と偏見に基づく差別ではないか」と労働者と学生の間で話し合いがもたれ、その指示は撤回されたことがあった。

当時、ぼくはキリスト者を中心に釜ヶ崎で活動していたグループに参加していた。そこでいっしょに活動していた女性に「このことをどう思う？」と聞いた。その人は、「確かに釜ヶ崎の労働者に対する差別だと思うけど、そうとばかりはいえないところもあるので・・・」と胸のうちを明かしてくれた。彼女が、最初にひとりで釜ヶ崎に来たときは、右手に護身用に小さなハサミを握りしめていた、と。

その頃のぼくは、せつかく胸の内を明かしてくれたその女性の気持ちをどこまで理解できたのだろう。そんなことを事務局会議で思っていた。日雇い労働者に対する差別と女性に対する差別が別々に考えられる時は、なんとか理解できるのだが、両方がいっぺんに起こる時には、わからなくなる。

今は、この出来事には二つの側面があったと思う。ひとつは、日雇い労働者に限らずある特定の人びとをラベル付けする時、性に関することが利用されるということ。例えば、1990年代初めに関東地域で「外国人労働者が主婦をおそう」と、滞日外国人に対するデマが広がったことを覚えている。もうひとつは、女性に対するセクハラのような人権侵害は、

権力や状況、人間関係を利用して女性の性的権利を侵害するところに起きるので、それを利用しようとする人がいる限りどこでも起きる可能性があるということ。自分の行っている大学でも、大学院の女性が指導教授からセクハラを受けたと裁判を起こしている。セクハラは、特定のだれかの問題ではない。広く、女性と男性、人と人との関係の中から生ずる問題だと思う。当時は、この二つの面を分けて考えることができなかったと思う。しかし、あの時の女性のことがこれですべてが見えた訳ではないと思う。これからも、一つひとつ取り組んでいきたいと思う。労福のメンバーといっしょに考えていきたいと思う。

中村ちひろ(北海道大学教育学部 2年)

私がこの労福会に参加するようになって早くも半年以上が経ちました。半年の間に、本当に沢山のことを学ばせてもらったと思います。それを挙げていきりがないので、ここではどうして私がこの会に参加するようになったのかを書かせてもらいたいと思います。

まず、私はもともと1年生の時の一般教育演習で椎名先生のホームレスの授業に興味があり、第2希望にはしていたのですが、うっかり第1希望にうかってしまったため授業にはでられませんでした。そこで、2年になってこの会を知り参加してみようと思いました。私の出身地は冬でもほとんど雪は降らないし、気温がマイナスになることもほとんどないのでホームレスの人は駅などに昔から沢山いました。けれど、自分が大学で北海道に来ることが決まったとき、北海道にはホームレスの人はいるのかな?でもあんな寒いところで外で生きていけるはずないよな?と疑問に思っていたところ、実際には予想よりも沢山のホームレスの人がいて驚きました。そんなホームレスを支援している団体があり、しかも北大の中にあるならぜひ参加したい、と思ったのが始まりでした。

次に、まあこちらのほうが結構大きかったりするのですが、大学も二年になり、毎日バイトに明け暮れるだけではなく、何かそれ以外のこと、できれば少しでも人の役に立てるようなことをしたいなと思っていたのです。そんな時に運良くこの会を知り、上に挙げたような理由もあって、これなら!と思って参加させてもらうようになりました。

そんなこんなで半年ですが、私はまだ自分の中でのこの会の活動における様々な意義や問題みたいなものがあまりつかめていません。これからはまた会と関わっていく中でそれを見つけていきたいと思います。

諏訪絢子(法学研究科修士課程 1年)

最近就職活動を始めた。ホームレスの自立支援を3年もやっていたおかげでエントリーシートに書くことはつぎることがない。わたしにとって、労福会とその活動は、自己アピ

ールのツールである、と思える程、達観してきた。

恐らく、面接では、会社に応じて、その会社に合う話を臨機応変にアレンジして、如何に有意義な経験をしたかをアピールするだろう。因みについさっき、とある証券会社のエントリーシートに自信満々で記入したばかりだ。

しかし、以前は全くそんな風に考えていなかった。会の活動、ホームレスの自立支援にあらうことか「3年」も費やして、しかも現在進行形の自分を中々受け入れることができなかった。当事者との関わり、憲法 25 条の「光と影」、暗い話題には事欠くことが無い。私は、1年前まで、ホームレスという存在を社会がどう見るのか、またホームレスを支援することは人からどうみられるのか、そして、私は何故この活動に参加しているのだろう、といった視点を結ぶ三角形（柱）の中をうろうろしていたのだ。しかし、その三角形は勝手に自分が作り出したもので、かなり限られた狭い世界であることがわかった。

大学院に入ってから、色々な人にこの活動について話す機会があった。大学時代何をやっていたのか、聞かれる度に、つくづく、自分にはホームレス支援しかネタがないことがわかった。でも、考えようによっては、すごいことだ。一旦社会の中で落ちるところまで落ちた人間が、どうやったらもう一度希望を取り戻して、再生するのか、そのプロセスを見て、考えてきたからだ。しかも 20 代で。

もちろん、万人に当てはまるモデル=再生プログラムなどないだろう。しかし、もし自分が入った会社がつぶれたり、自分がクビになったり(←こっちの確率の方が高そう)、ゆくゆくは日本が破綻しても、全く絶望することはないのかな、と思う。というか、ある意味、また全然別の人間になれるチャンスだと思って受け止めるだろう。それには、誰かの力が必要で、その「誰か」が存在するという事実、を信じられるか、で、その人の人生は決まる？！

こんなヘンテコな確信をもって、今後もホームレス問題を考え続けていきたいです。

最後に、営業活動ですが、現在進行中の居宅調査へのご協力、よろしく願いいたします。

寺嶋祐一（北海道大学経済学部 3 年）

やはり「私と労福会」では超定番の話題である「なぜ活動をしているのか」について書きたいと思います。みなさんは「なぜ活動をしているのか」と聞かれたら、どう答えますか。なかなか難題ですよ。一言で言い表すのは難しいし、大した理由もない気がするし、アツイことを言ったらひかれそうという場合もありますよね。きっと自信をもって答えられる人はなかなかいないのではないのでしょうか。ちなみに私の場合、こう答えます。「なぜ活動しているか、わからないような人がたくさん活動しているから」です。これが、私が活動を続ける一番の理由です。何を目的にしているかもわからない、何がしたいのかもわ

からない、けれどもなんとなくかわいそうだから野宿者を放っておけないというスタッフに囲まれて活動するのは、もう楽しいと形容する他ありません。ちょっと熱くて、でも頼りなくて、人間くささ溢れるスタッフに私は本当に興味があります。「ホントなんでかつどうしているの?」。全員が濃いーけど、それぞれが独自の濃さを持っています。よくいえば多様性がある。悪く言えばバラバラ。そして、こんなスタッフとああでもないこうでもない話し合うことは自分の楽しみであると同時に、広い目で見れば、野宿者のためにもなると自分に言い聞かせて(みんなに言い訳して)今年度は活動してきました。毒舌を吐きつづけたのはこのためです。許してください(笑)。

今年になって気付いたことがもう一つあります。昔は「誰にだってホームレスになる可能性がある」なんていわれても全く信じていませんでした。ケツというかんじで、俺は絶対ならんぞとっていました。しかし、野宿者と自分、似ているところがありますねー。明らかに誰かに頼ったほうが良さそうな状況であるのに、「男の意地」がそれをさせない(笑)。とりあえず見栄をはってみる。でも、誰かにかまってもらえるとすごく嬉しそうにする。まさに自分だと思ってしまいました(笑)。単に私は「自分と似ている人(野宿者)」に共感し、今までお手伝いをしていたということに気付かされました。生活保護を申請するとき、学生に同伴されるなんて屈辱的だろうなど。「いかにして自分が転落してしまったか」を赤の他人に、しかも自分よりずっと若い学生に聞かれるのは非常にしんどいと思います。それこそ「男の意地」で断りたくもなると思います。そういう人達に対して、せっかく良かれと思ってやっているのに…という態度で臨むのは間違いだと思います。そんなことをしたら、それこそ再起不能になってしまいそう。うん、同じタイプの人間が言うのだから間違いはない(笑)。もちろん、このような野宿者への共感も活動を続ける大きな理由のひとつです。

さて、最後に来年度の課題めいたものをひとつ。偉そうですが、見栄っ張りの自分から超多様なスタッフへ。いろいろな考えの人が活動しているという点が労福の最大の魅力であると同時に、それは組織としての脆さを抱えているともいえると思います。会で何かをしようとするとき「労福は〇〇の会だから、××しよう」といえますか。ここでいう〇〇は会の共通認識であったり、未来像であったりすると思います。これが揺らいでいるようなら危険だなど。某副代表様の意見に酷似している気もしますが(苦笑)、会員への説明責任を果たすにも、新たにスタッフやお金を獲得するにも〇〇は必要となります。そして、なにより〇〇がなければ自分たちが活動しづらい。多様なスタッフの中から共通項を探りだすような議論を重ねていければと思います。タフな議論になることは間違いありませんし、ときには火花が散ることもあるでしょう。でも、考えただけで楽しそうですね(笑)。

それではまた来年頑張りましょう!!

追伸：裏方として頑張った山本君へ

会計係お疲れ様でした。意外と大変だったでしょう(笑) 会計の大変さは俺が一番

よく知っているつもり。そして俺は会計係りのとき文句ばかり言っていました。
きっと「なんでこんなことを」と思いながらも山本君は文句ひとつ言わなかったね。
立派でした。

さよならのかわりに

南部葵（北海道大学大学院教育学研究科修士課程2年）

ここ数日、事務局の主要メンバーを中心に総会原稿の校正が行われてきたので、一緒に参加させてもらった。今年あたりの原稿を読んでいると、この5年半でどれだけ会の活動内容に厚みが増したのかということを感じさせられる。振り返ってみると、ぼくらが中心にやっていた会設立当初は、本当に大したことをやっていたなと思う。ただひとつだけ、今と違ってよかったと感じることは、「支援すること」について、周囲の人たちはもとより、野宿をしている当事者から、絶え間なく批判と疑問の声が寄せられていたことだと思う。しかし、この批判と疑問は、当時のぼくらにとって本当にやっかいな代物だった。

「冬の寒い夜空の下で寝ている野宿者の皆さんに温かい食事を食べてもらいたい」程度の「軽い」（少なくともぼくら学生はそうだった）気持ちで実施した炊き出しがマスコミに取り上げられたことで、大きな波紋を呼んでしまった。「無責任なことをするな」「地域住民（施設）の気持ちも考えろ」「子供騙しみたいな活動で本当に野宿者のことを考えているのか」「炊き出しをすることは野宿生活を長引かせてしまうのではないか」「支援活動によって野宿生活がしづらなくなった」云々・・・数え上げればきりが無いほどの声が浴びせられた。「野宿者と違う立場の人間が、自分たちの視点で野宿者の問題を考えてしまうこと」の苦しみ直面させられたのである。ぼくらは必然的に自分たちの活動の意味について議論を重ねざるをえなかったが、そもそも答えがひとつでないものだから、みんなが納得できるようなまとめができるはずもない。こんな会の姿勢に嫌気をさしていなくなった当初メンバーも決して少なくはなかった。

そんな状況のなか、ぼくが学部3年のときに3代目の事務局長を経験することになった。最初の会議で、支援したいという坊さんの説教にはじまり、会議の反省会では夜遅くまで、友人や会のメンバーに活動の是非について問われ続け、役所や病院では「また、変なやつらが来た」と悪評いただく毎日だった。頼りたいような肝心なときに、佐々木先生（現副代表）はいつもインドに出かけていていないし、椎名先生（現代表）は笑顔で話を聞いていることが多かったし。「あーもう、どうすりゃいいんだ。こんなこと安易に手を出さなければよかった」と僕自身悩み続けていたときだった。

ぼくにとってその頃は、いかにつきがなかった時期だったかと今でも思う。そもそも佐々

木先生（現副代表）から「南部君、事務局長になったら女の子にもてるよ」という言葉に乗せられて、つい引き受けてしまったのだが（騙されたと気付くまでにそう長い時間は必要としなかったが・・・）、多忙のまま1年が過ぎ、その年度末には某新聞による会の活動特集の見出しに『情けに篤い事務局長（南部）は彼女を作るヒマも無く』と書かれてしまうオチまでついた。

結局、自分なりに「支援の必要性」や「どういう支援をすべきなのか」という答えを見つけなくては自分のやっている活動に自分自身で自信が持てなくなっていた。そこで野宿者支援の原点に立ち返って、「なぜぼくは支援をしているのか」考え直すことにした。ちょうどその頃に、野宿者の人たちとできるだけ付き合う「対話」の重視に気づかされたように思う。1人1人のケースに付き合うから多くの人とは接することはできなかったが、非効率であっても実際に野宿者の人たちと「問題を少しでも共有しよう」とする姿勢には効果があった。会議だけではみえていないことが多く、学ばされることがほとんど毎日にかわった。まわりの人間がどう言おうと、野宿者のことをより知っているぼくの意見には説得力が出てきたし（そう勝手に思い込んでいる）、何も知らない人がいう中傷・疑問に対して、自分の強みにもなった。そうはいっても、いつまでもつながりを持ち続けていないことも多かったので、野宿者の人たちからお叱りを受けたり、途中でいなくなった元野宿者の人たちのことを思い出すたびに、「痛いつ」という後悔の連続だったような気もする。「付き合う」という意味では、ぼくは最近、あまり会の活動に参加できる機会が少なかったため、いつも野宿者の人たちと接しているメンバーと話したときなどは、「あー、先輩ぶって、なんぼえらそんなこと言ってもかなわないな」とつくづく実感させられる。

今になって思えば、まわりからの批判と疑問が多く聞かれ、それなりに耳を傾けてきたことが、苦しくも常に活動や思考のいい刺激になっていた。それが最近、まわりも野宿者も素直になってしまったように思えてならない。活動がよりよいものに近づいているからなのか、信用されはじめたからなのかはわからないが、批判や疑問が投げかけられない活動は小さくまとまってしまうのではないかという不安もある。「助かりました。ありがとう」と頭を撫でられなければできない支援では、いけないと思う。もがき苦しみながらも、一喜一憂しながら朝までみんなで話し合っていたあの頃がちょっぴり懐かしい。

会設立当初から関わっているメンバーはほぼいなくなったが、最近はあらためて、「自立支援の意味」について問い直そうという活発な議題が出されていた。机上の理論に終わらせないためにも、ぜひ少ないケースでいいので、野宿者との「対話」や「思いやり」をもつ関わり方を続けてほしい。ケースによっては、しんどいことも確かにあるが、自分のできる範囲を超えずにしつこく関わり続けることで、自然となすべき方向性がみえてくるのだと思う。はじめは「ちょっと関心があって覗いてみた」というレベルだった学生や市民が、そのきっかけを活かし、悩み苦しみながらも頑固なまでに「活動を続け進化し続けてきた」ところにこの活動の真価があると思う。

カリスマ的魅力で会のメンバーをまとめていった山内事務局長（2代目）が去った後、そ

の後を継いだぼくら世代は、微力ながらも、何とか会を支え続けなければという責任感みたいなものをずっと感じてきた。しかしここに来て、ようやくヤル気に満ちた頼もしい連中が次々と頭角を現し、やっと次世代の人たちへバトンを渡す最低限の仕事を果たせたかなという安堵感がある。でも新旧世代交替はちょっぴり寂しいというのが本音のところかもしれない。

「明日から普通の男の子にもどりまーす」

(おしまい)

9. 来年度の役員紹介

顧問 杉村 宏 (法政大学現代福祉学部教授)
代表 椎名 恒 (北海道大学教育学部助教授)
副代表 佐々木宏 (北海道大学教育学部助手)

事務局幹部 本間 朋子 (市民の方)
真鍋 千賀子 (市民の方)
中山 治光 (市民の方)
塩崎 満子 (市民の方)
世良 迪夫 (北海道大学工学部 2年)
篠原 睦 (北海道大学教育学部 3年)
中村 ちひろ (北海道大学教育学部 3年)
山本 侑 (北海道大学薬学部 3年)
高柳 晴香 (北海道大学教育学部 3年)
千葉 あゆみ (北海道藤女子大学 4年)
嶋田 宇大 (北海道大学理学部 4年)
寺嶋 祐一 (北海道大学経済学部 4年)
諏訪 絢子 (北海道大学法学部院生)
椎名 結実 (北海道大学法学部院生)
安部 薫道 (北海道大学法学部院生)
松林 恵介 (北海道大学医学部 5年)